

二宮町立山西小学校

研究テーマ：9年間を見通した共通性と一貫性のある指導・支援を通した、
「学びに向かう力」の醸成と資質・能力を育む指導のあり方（4年次）

1 実践の目的

二宮町では、令和5年4月より町内すべての学校が1つの施設分離型小中一貫教育校『にのみや学園』となった。学園の開校に向けて、にのみや学園の教職員全員の願いや想いを紡ぎ、教育目標を次の通り定めた。

『認め合い 高め合う 二宮の子』

この教育目標を実現するために、子ども同士の学び合いや話し合いを中心とした授業づくりに学園全体で共通性と一貫性をもって取り組んでいる。学級づくりの基盤や学習の進め方を揃えることで、子どもたちが安心して学んだり、進級したりできるようにするとともに、9年間を見通して子どもたちに必要な資質・能力の育成を図ることができると考える。

子どもたちに育みたい資質・能力を学園内で共通理解を図り、授業づくりを進めることを大事にしている。

二宮町で育みたい汎用的な資質・能力		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
①主体的に継続して勉強する	①必要な情報を集めて分析する	①多様な価値感の仲間を増やす
②多様な学びで知識を吸収する	②状況に応じて適切に判断する	②互いの違いを認めて高め合う
③知識を応用して上手に使う	③論理的で柔軟に思考する	③諦めずに自分の夢をかなえる
	④自分の考えを正しく伝える	

授業づくりでは、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」を意識し、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力・人間性を一体的に育てて

いくための授業改善を図ることを意識している。

特に、4年次となる令和6年度においては、学びに向かう力を高めていくために、以下の内容も研究の視点に加えて取り組んだ。

- ・習得の授業における子どもの主体性
- ・日常生活や学校生活との関連付け
- ・学習活動や単元全体の目的意識の共有

2 実践の内容

（1）研究体制

今年度も引き続き、教育力向上アドバイザー吉新一之氏（元川崎市立川崎小学校長）を講師に迎え、指導・助言を仰いでいる。

（2）研究授業、研究協議の様子

今年度は6月21日に4年生による国語科、9月20日に2年生による国語科、11月15日に5年生による社会科を研究授業とした。

4年生の実践では、児童の聴く姿勢が素晴らしく、今までの指導の積み重ねを実感することができた。児童の発言量もさることながら、発言に対する反応がよく、一人一人の意見を児童同士で大切にしていることが分かる授業であった。受容的な学級集団作りが協働的学びにおいて不可欠であり、そのため



に「聴く」指導に重点を置くことを、全職員で確認することができた。

2年生の実践では、自由に学習集団を作る子どもたちの姿が印象的であった。子どもたちが実際に行うことで、多



くの学びがあるだろう。その一方で、研究の共通性と一貫性に関しては再確認の必要性を感じ、子どもたちにつけたい力や、その力をどのようにつけていくかを、学校全体で貫くことで、真に子どもたちに力をつけることができるのではないだろうか。

5年生の実践では、主体的に話し合いの授業を進める子どもたちの姿があった。発言という行為一つとっても、感想、アドバイス、質問、考え、まとめなど、様々な種類があった。子どもたちの多様な学びを保証する授業となっていた。また、学習方法も学級ならではの工夫が見られていた。共通性と一貫性を担保しつつ、それぞれの先生方が子どもたちと授業を作っていく、そんな未来の授業像を垣間見ることもできた。この授業には、教師の「子どもにつけたい力」に関わる明確な考えがあった。話し合いの授業は、子どもに学びのハンドルを預け、子ども自身が学び方を習得していくことにねらいがあるが、それは、教師の深い視座のもと実践されることで、より質の高いものにつながった。



3 実践の成果

研究を積み重ね続け、基本的な話し合い

の授業のスタイルは定着しつつある。この「基本」が学校として定着していることで、授業は安定し、子どもたちが安心して学べる環境づくりにつながるだけでなく、学びの成果も質の高いものになっている学級が増えてきている。

これらの実践より、共通性と一貫性に重点を置いて、学校教育を進めていくことの大切さをさらに実感することができた。

しかし、このような子どもの姿を実現するためには、低学年からの積み上げは必須である。まずは、「聴く」ことに関する形とその形を支える内面の心を育てる指導を積み重ねていきたい。「聴く」ことの指導の積み重ねは、本研究の根幹に関わる部分になるのではないか。

また、「深い学び」への教師の追究姿勢が見られるようになってきた。研究討議でも、「授業の深まり」を観点として話し合われる機会も多々あった。これは、教師の意識改革の表れである。「6つの手立て」を機械的に実践するのではなく、「6つの手立て」を通して子どもたちを育てることと深い学びを両立しようと考えているのである。

この「今ある手立てをただ実践する」という意識からの脱却は、「守・破・離」で言えば、「破」の段階に入ってきた証であり、このことは、教師の個性を生かした授業実践につながっていく大きな可能性と呼べるのではないだろうか。

4 今後の展開

継続的な研究により培ってきた「受容的学級集団」と「その学級集団による話し合いの授業」を土台とし、先生方の個性を生かした発展的な取り組みも考えたい。そのためにも、共通性・一貫性と多様性の調和を図る研究のあり方を模索していきたい。